

資料 7 (当日差替)

統合による具体的なメリット・デメリット

統合校の特徴（小規模校としての特色・課題）

学校のあり方	小学校としてのカリキュラム（これまでの小学校と同内容） ★一人一人に目が届きやすく、児童の個性や能力に応じたきめ細かな指導が受けられる教育環境
小規模校としてのメリット	●児童・教員・保護者を含めて互いの結びつきが深くなり、家庭的な人間関係を形成しやすい。 ●他学年との交流ができやすいため、互いを思いやる気持ちが育つ。 ●施設・設備の利用時間等の調整が行いやすい。 ●クラブ活動や行事等において、児童一人一人の活動機会や活躍の場が得られやすい。
小規模校としてのデメリット	●より良い集団を目指す、学級間の相互啓発・競争意識が発揮しにくい。 ●個と集団の学び合いが十分に行われない。 ●交友関係が固定化され、適度な刺激や切磋琢磨が少ない。 ●運動会や学芸発表会などの学校行事においては、少人数のため種目や演目に限界があり、行事としてのダイナミックさに欠ける。 ●友人関係にトラブルが起きると後々まで影響が残る可能性がある。 ●少人数の教員との関わりに限られるため、多様な価値観が育ちにくい。 （担任教員を中心としたカリキュラムの場合）

強みを生かす&デメリット解消につながる取組

他地区で協議している事例

●松山市立清水小学校

清水小校舎を活用した交流施設（社会福祉協議会）での地域交流

●新潟県粟島浦村立粟島浦小中学校

小学校低学年生活科の授業「命の教育」として、生き物に寄り添うことで命の大切さや思いやりを学ぶことを目的とする。馬の世話を通じて、生き物が幸せであるために必要なニーズを理解し、それを満たす行動を自分の役割として担う。
「生命尊重の心」「探求心」「問題解決能力」「地域への理解」など

地域との交流により、多様な考えに触れる機会を増やす

年代を越えた社会人との交流により、社会性を身に付ける。

その他（案）

- 玉川地域を広く知ることとふるさとを理解する（産業・文化を学ぶ「地域学習」の充実）
- 既存の両小学校での特色を基にした統合校での魅力的な取組の設定

統合コーディネーターによるメニューの具体化（既存校では対応できない業務）

鴨部・九和小学校の児童にとって統合することについて

※ _____ 線は鴨部小学校のみ該当

区分	メリット	デメリット
学習・活動面	● <u>授業 1 コマがその学年の授業に充てられる（自習時間がなくなる。）</u> ●学級内の人数が増えることで、多様な意見に触れる機会が増える。 ●学級内・学校全体の人数が増えることで、既存校では出来なかった活動が可能となる。	●一人一人の活躍機会が低下する。 （小規模校であるため、活躍機会は確保しやすい前提）
人間関係	●同学年の活動が増えることで、横のつながりが強化される。 ●同学年の人数が増えることで、刺激や切磋琢磨する機会が増える。	●既存校で行われていた地域との交流活動が縮小・見直しされる。 （多様な考えにふれる範囲は広がるが、頻度・濃度は減る）

統合場所の違いによるメリット・デメリット（鴨部小の場合）

① 鴨部小学校の児童にとって 【鴨部小学校で統合する場合は、変更点なし】

② 鴨部小学校の児童にとって 【九和小学校で統合する場合】

区分	メリット	デメリット
学習・活動面	●屋内・屋外運動場が広がる。	●新しい環境に慣れるのに時間がかかる。
通学面		●徒歩通学時間が延びる。 ●スクールバスでの通学を要する。 （登下校の時間が限定される）

※鴨部方面からのスクールバス想定台数：2 台（37 人）

統合場所の違いによるメリット・デメリット（九和小の場合）

③ 九和小学校の児童にとって 【鴨部小で統合する場合】

	メリット	デメリット
学習・活動面		●屋内・屋外運動場が狭くなる。 ●新しい環境に慣れるのに時間がかかる。
通学面		●徒歩通学時間が延びる。 ●スクールバスでの通学を要する。 （登下校の時間が限定される）

※九和方面からのスクールバス想定台数：1 台（14 人）

④ 九和小学校の児童にとって 【九和小学校で統合する場合は、変更点なし】

鴨部・九和小学校の児童にとって中学校校舎で統合することについて

区分	メリット	デメリット
学習・活動面	<ul style="list-style-type: none"> ●中学校に上がるときの不安が軽減（施設等環境の急な変化が軽減） ●9年間を通した切れ目のない指導が受けられる（つまづいている教科を早めに手当てしやすい：教員同士の情報共有） ●校則や生活ルールが一貫して分かりやすい（9年間で基本的な生活ルールを一貫して指導できるため、見通しが立ちやすい） 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校卒業という節目の実感が薄くなりやすい ●9年間、同じ校舎で環境変化がない ●新しい環境・世界に触れる機会が少ない（リセットされないことでストレスはないが、刺激もない）
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ●上級生との関わりを通じた成長が見込まれる（身近に目標となる中学生がいることで社会性が育まれる） 	<ul style="list-style-type: none"> ●9年間、同じ校舎で人間関係が固定化されやすい ●年齢差による影響への配慮が必要（思春期の中学生の言動や振る舞いが、低学年の小学生には刺激が強すぎる・悪影響になるうる懸念）

※スクールバス想定台数：2台【鴨部方面から1台（7～19人） 九和方面から1台（9人）】

授業時間の違いによる影響（小学校 45 分、中学校 50 分）

- 給食時間が異なる ⇒ 生活する階を分けることで影響を軽減（小学生2階、中学生3階）
 - 休み時間が異なる ⇒ ノーチャイム（全体でのチャイムを廃止し、各教室で時間を確認）
- ※岡村小学校・関前中学校で運用中。

全国的な事例（文部科学省の事例集から抜粋）

学年区分の設定 多くの学校で 4-3-2 制であるが、6-3 制、5-4 制などもある。

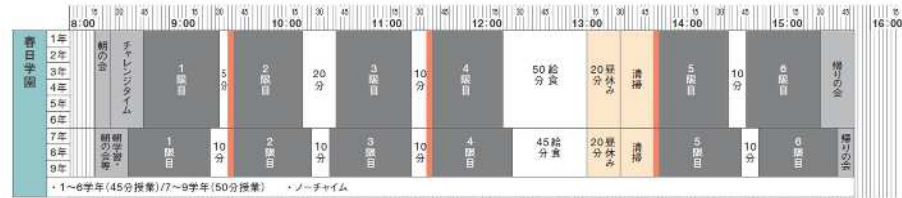
教科担任制：小学校段階から実施

乗り入れ授業実施の有無：中学校教員が小学校で実施するのは、全ての学校で実施。

小学校教員が中学校で実施するのは、一部の学校で実施。

授業の1単位時間：多くの学校で小学校（1～6年）45分、中学校（7～9年）50分
 一部では1～9年で45分に統一、又は5～9年で50分の場合もある。

（例）文部科学省(2015)「先行事例における計画・設計の事例間比較」



中学生にとって中学校校舎で統合することについて

区分	メリット	デメリット
学習・活動面	<ul style="list-style-type: none"> ●系統的・継続的な学習により、中1でのつまづき（学習内容・生活リズム・人間関係）の軽減が期待される ●中学生の不登校出現率の減少や、学力調査における平均正答率の向上が期待される ●9年間を通した切れ目のない指導が受けられる（つまづきやすい単元の前倒し・反復や小中教員の相互乗り入れ授業等） ●校則や生活ルールが一貫して分かりやすい（9年間で基本的な生活ルールを一貫して指導できるため、見通しが立ちやすい） ●行事の系統化・役割の段階的発展（例：下級生の世話➤リーダーシップの発揮）により、中学生段階での自己有用感・責任感向上が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校から中学校まで同一校舎であるため、学習・生活のメリハリが弱まるおそれがある（意識的な節目の設定が必要） ●新しい環境・世界に触れる機会が少ない（リセットされないことでストレスはないが、刺激もない） ●小中教職員が一体で運営するため、組織運営が複雑化し、個々の中学生に十分な時間を割きにくくなる懸念がある（運営体制の複雑化による個別対応への影響）
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ●9年間を通じて、教職員と児童生徒相互の理解が深まり、きめ細かな支援につながる。 ●異年齢集団での活動により、自尊感情の高まりや規範意識の向上が期待される。 	<ul style="list-style-type: none"> ●9年間、同じ校舎・同じ顔ぶれで過ごすため、「新鮮さがない」「人間関係をリセットできない」（環境変化がない） ●年齢差による影響への配慮が必要（思春期の中学生への小学生が校舎内にいるストレスへの対応）

配慮すべき事項

●施設面

- ・中学校校舎の「スケール」「階層構成」を前提に、低学年の安全性・生活性（トイレの高さ、階段昇降、教室規模）、放課後児童クラブとの動線、安全なスクールバス発着空間などの担保

●教育課程・組織面

- ・中学生のメリットを最大化するには、単に同じ建物にいただけではなく、「中1ギャップの分析に基づくカリキュラムと評価の一体化」「教職員組織の再設計」が不可欠

●児童生徒・保護者の声

- ・特に「人間関係のリセットの機会」「高校進学時の適応」をどう保障するかは、中学生側のデメリットに対する具体的な手当て（選択制の活動、外部との交流機会、スクールカウンセラー体制等）を設計段階から組み込むことが重要